

“ENCOUNTERS”

令和6年度文化庁メディア芸術クリエイター育成支援事業
成果発表イベントにて、特集上映。

2025. 2/15 Sat. - 24 Mon.

Open: 11:00 - 18:00 (the entrance gate will be closed at 17:30)

会場：TODA HALL & CONFERENCE TOKYO

〒104-0031 東京都中央区京橋 1-7-1

TODA BUILDING 4F

入場料：無料

主催：文化庁



PAROLE

Take Free

Sukimaki Newspaper PAROLE Vol.8 | January 18, 2025

<https://sukimaki.com>

@sukikara_makiko

パ ロ ル vol. 8



SUKIMAKI
ANIMATION

2007年に鋤柄真希子が立ち上げたアニメーション・スタジオ。

2010年以降は松村康平と共にマルチプレーン撮影台を使った短編
アニメーション作品を制作している。

現在、動物と植物が織りなす宇宙を舞台にした新作SFファンタジー
『LUNATIC PLAN(e)T』を制作中。

絵本『ねこはねこのゆめをみる』(¥1,980)

えほん館ネットショップにて販売中。



えほん館ネットショップ

文学フリマ京都9に出店します。ブース# あ-79

2025. 1/19 Sun.

Open: 11:00 - 16:00 (the entrance gate will be closed at 15:55)

会場：京都市勧業館みやこめっせ 1F 第二展示場

入場料：無料

レゴリスにウンチが落ちる

刈った草を畝の土に被せておくと、あっという間に無くなって土が顔を出す。誰かが草を持って行った訳ではなく、草が分解されて土に戻っているのだけど、その光景は何度見ても不思議な気持ちになる。コンポストで寝かしておいた生ごみを土に埋める。数週間は土が奮闘しているような気配が漂っている。忘れた頃に掘ってみると埋めたはずの生ごみは跡形も無くなっている。そうしてできた土は素晴らしく美味しい野菜を育ててくれる。

そんな時はいつもどこかで見た土の中の微生物の顕微鏡写真（たぶん菌根菌のコロニー）が頭に浮かぶ。濃紺の背景に青白く光る微生物がまるで星空のように見える写真。土の中に広がる無限の宇宙が、刈草と生ごみをムシャムシャと食べ、美しい光を生み出す様子を妄想して楽しんでいる。

さて『LUNATIC PLAN(e)T』^{(*)1}では、物語の中で月に移り住んだ動物たちによって森が作られる。月の表面はレゴリス^{(*)2}と呼ばれる砂で覆われていて、もちろん植物は生えていない。顕微鏡でレゴリスを見るとトゲトゲとした形をしているらしい。可愛い星の形を想像してしまうが、吸い込んでしまうと気管を傷つける厄介者とされている。月に森を作るには、レゴリスを土にしなければならない。

そもそも土とは何なのか。ウィキペディアによると、土とは地球上の陸地の表面を覆っている鉱物、有機物、気体、液体、生物の混合物である。レゴリスに足りないものは、腐植、空気、水、微生物。どうしたら足りないものを補えるだろうかと悶々と考えていた。動物のままで死を迎え、亡骸が土を作るのはどうだろうか。いやそもそも亡骸を分解するのは土にいる微生物だ。分解者である微生物はどこからくるのだろうか。植物の根には微生物を呼び寄せる力がある。宇宙に向けて根を伸ばし微生物を呼び寄せてはどうだろう。宇宙に向けて根を伸ばす木を描いてみようかなと松村さんに話していたら、数日後に「動物がウンチをしたらいいんじゃない？」と言われた。

ウンチには足りないもの全てが詰まっている！

(*)1 『LUNATIC PLAN(e)T』：地球から月へと移り住んだ動物たちが植物にメタモルフォーズし、森を作るというSF作品です。クマ、ウサギ、ネズミ、オオカミ、フクロウなどたくさん動物が登場します。キリンは銀杏、ゾウはセコイア、といった具合にその動物の形から連想される植物へ姿を変え、本来ならありえない生態系の森を作っていきます。

(*)2 レゴリス：厳密には固体でできた惑星や衛星、小惑星などの天体の表面を覆っている堆積物の総称のことを指す。ここでは月の砂を「レゴリス」と呼ぶことにする。

夢の中で時が流れる、今年の初夢の話

夢の中で古着屋さんに入った。狭い路地裏にあるそのお店は看板も出していない隠れ家のような場所だった。入ってみると閉店セールをしていて、ラックにはまだ少し商品が残っていて、まだ掘り出し物がありそうな予感にワクワクしながら店内を物色し始めた。シックな色使いのワンピースを手にとった瞬間にふと記憶が甦った。この古着さんが華やかな色使いのワンピースで埋め尽くされていて、たくさんのお客さんで賑わっている昔の記憶。

「私、ここに来たことがある。昔見た夢の中で。」

夢の中で夢の記憶が蘇るといのはとても奇妙な経験だった。夢の中でも時間が流れていて過去や現在、未来もあるのかもしれない。普段は目が覚めるとさっきまで見ていた夢のことはすぐに忘れてしまう。でも忘れてしまった夢は思い出せないだけで消えてはいない。ちゃんと自分の中に記憶され蓄積されているのかもしれないと思うと、自分の中に自分が忘れている世界があり、そこで何かを感じ考えている自分が見たいで不思議な気持ちになった。

散歩する無意識 -松村康平映画評-

『HAPPYEND』 (2024) 空音央 と 『シビル・ウォー アメリカ最後の日』 (2024) アレックス・ガーランド

空音央監督の長編第一作目となる本作は、かなり近い未来の日本に生きる高校生たちのリアルを描いた青春映画で、観ているそばから『キッズ・リターン』を彷彿とさせる親友との不協和音や台湾ニューシネマの雰囲気漂いはじめ、自身の思春期の思い出と絡まって脳内を刺激する。しかし本作と台湾ニューシネマが等身大の若者を瑞々しくショットにおさめるという共通点を持ちながら大きく異なる点は、過去を主題にするか、未来を主題にするかにある。若者の視点を通して国や社会の姿を描き出した台湾ニューシネマが主に過去の出来事や史実に着想を得て埋もれていた歴史を鮮明に甦らせた一方、『HAPPYEND』は近未来を舞台に設定した上でこのままではいずれそうなるであろう現実の歪みを今事として描いてみせる。そこで描かれる多様な移民との共生は若者にとっては息をするように当たり前の環境として、社会にとっては済し崩しのしゃなし的態度として世代間の分断を露呈させる。高校生活にも監視カメラが導入され、全体主義へと向かう行き詰まった構造の中で主人公たちは未来を想像することすら難しく、仲間との友情のみを確かなものとして彼、彼女らの日常を繋ぎ止めている。

本作は新人の役者を多用したキャスティングのみならず、撮影、美術、ロケーションを含めて異様なことどもが当たり前と成り果てた近未来像を丁寧に演出している。意図的に空が見渡せないカメラアングル、とりわけ主人公たちの生活圏に覆い被さる高速道路の存在は世界の閉塞感をより強調するものとして機能している。地球温暖化の影響を加味してかずっと夏用の制服で過ごす高校生たち、巡り回る季節感を剥奪することで停滞感が醸し出される。ビル全体がサイネージ画面になっているブレードランナーに出てくるような風景もただビル一棟にぼつねんとCG合成するに留める、低予算が齎したVFXは奇しくも衰退する日本の経済状況を表現するのにかなり相性がよい。などなど。

同じく2024年に公開された『シビル・ウォー アメリカ最後の日』は、A24 史上最高の製作資金を注ぎ込んだ作品だが、観終わった後でも一瞬どこに金がかかっているのか分からない程に、SNSで日々流れてくる凄惨な画像に晒され自分の感覚が麻痺していることに気付かされる。熟慮するまでもなく街中での武装勢力とデモ隊との衝突、戦闘機や戦闘車両を含む軍隊の描写、ホワイトハウスでの銃撃戦のシーンは相当予算のかかる撮影である。しかしさまざまなメディアで飛び交う戦争やテロの動画にタダで触れている私たちにとって（正確にはタダではない）、誤解を恐れずに言えば『シビル・ウォー』で撮影された戦闘シーンは最早贅沢なイメージではない。本作のハイライトはジェシー・プレモンズが狩猟用の赤サングラスをかけて登場する集団墓地のシーンで、ジャーナリストである主人公たちを虐殺しようとする瞬間である。「Which kind of American are you?」という象徴的な台詞は、本作が架空の内戦（テキサス州（共和党岩盤支持）とカリフォルニア州（民主党岩盤支持）が手を組んで独立運動を主導するという設定があり得なさをより強固なものにしている。と注釈を付けたいところだが、カリフォルニア州は新自由主義の流れを背景に民主党離れが進んでいる。）を設定しているにも関わらず、この不気味な気分はアメリカの現状を的確に掬い取っている。

巨額の予算を注ぎ込んでフルスペックで内乱を描き切った『シビル・ウォー』。デモ行進などの大掛かりなシーンを敢えて見せないことで、あくまで高校生の日常に寄り添うように描かれた『HAPPYEND』。入射角は違えど両作に共通しているのは、フィクションの顔をして徹底的にリアリズムを標榜しているということだろう。